

レヴィナスにおける「私固有の／本来的な在り方」を巡る問い

高井寛（東京大学）

本発表は、レヴィナスが『全体性と無限』で展開した「私」の固有性を巡る議論を、ハイデガー『存在と時間』との対比において明らかにすることを目的とする。本発表は、四つの節に分かれている。まず、レヴィナスが「世界内存在」から着想を得て展開した「わが家にある私」の議論を確認する（第一節）。次に、『存在と時間』を繙きつつ、「本来的な在り方」についての規定を確認する（第二節）。その後、レヴィナスによる「本来的な在り方」への批判を確認したのち（第三節）、「私固有の在り方」が特権的に成立するとレヴィナスが考えた、他者との（倫理的）関係の内実を探る（第四節）。

第一節では、レヴィナスが自我の基本的な在り方として提示した「住まい」の議論を確認する。「住まい」とは、ハイデガーの「周囲世界」同様、存在者たちがそこで「適所」を得る場であり、そこには、「私」を起点とする有意味性の秩序が広がる。この「住まい」の内に在る自我の在りさまを、レヴィナスは「エコノミー的な在り方」と呼ぶ。

第二節では、ハイデガーの「本来的な在り方」を巡る議論を簡潔に再構成する。ここで確認しておくべきは、「本来的な在り方」が、「不安」を経験した現存在が自らの行為を自覚的に選択し、世界の有意味性を新しく切り拓く現存在の在りさまを指すという点である。

第三節では、この立論に対するレヴィナスの批判を再構成する。その批判は、「私」を取り巻く世界の有意味性が全く失われた状況（＝不安）で、現存在はいかにして「私」の自己同定を遂行するのか、というものである。

レヴィナスは、ハイデガーが陥ったこの困難が「身体の軽視」に由来すると考えている。というのも、身体を通じて外界に曝されることで、その主体は、何らかの感覚を受容する以上に、自分がいまここに、身体を持ってあるという理解を形成するからである。ハイデガーは、身体を軽視することで、「不安」の現存在が新たな行為の起点とするはずの「ここにいるこの私」を同定する根拠を見失ったのである。

レヴィナスのこの認定は、「不安」を巡る議論への批判という形をとってはいるが、そもそも人間が身体を持っていることは、現実に行為を遂行する上で欠かせない要素である。存在者が得ている「そこ」での「適所性」は、行為者が身体を持っている「ここ」から測られるからである。

以上の議論はしかし、ハイデガーの「本来的な在り方」ならびに周囲世界分析に対する批判に留まる。本発表の最終節では、レヴィナス自身がその分析に力を注いだ、他者との倫理的関係を、「私」の固有性を際立たせる経験として再構築することを試みたい。

さて、レヴィナスによれば、「絶対的な他者」との関係は、第一節で確認した意味で、なおも「エコノミー的」である。というのも、身体の「ここ」を原点とする住まいを生きる「私」が「他人 l'Autrui」と関係するとは、「私は世界がこのようなであると理解して行為す

る」という、世界についての理解を他者に正当化する（＝弁明する）義務を負うことだからである。

言語活動を通じてなされる、他者との「正当化の争い」のなかで、ある極端な仕方、「私」は自らの個別性に繋ぎとめられる。というのも、「住まい」の中にある存在者についての私の信念を、他者を説得する私の主張として、他者の問い質しに堪え得るような仕方「私」が正当化しなければならないからである。

他者との関係のただ中で、自我は「他でもなくこの私が」という「私」の個別性を引き受けなければならない。それは、特権的な仕方「私」の個別性が際立たせられる経験なのである。以上が、レヴィナスが提示する「私固有のあり方」である。最後に紙幅が許せば、上記の身体以外の論点から、これをハイデガーの議論と正面から「対決」させたい。